

郷土に定着する連携型中高一貫教育

学ぶ楽しさ、人のつながり作る

太田 眞

藤女子大学教授

聞き手 湯朝肇・札幌支局長

教育改革が叫ばれて久しいが、今なおいじめや不登校など学校教育の現場から痛ましい事件が話題にのぼる。政府は教育基本法の改正や道徳授業の充実、さらには長期自然体験学習の導入などを掲げ教育の正常化を図るが、道半ばという感が否めない。そうした中で藤女子大学文学部文化総合学科の太田眞教授は、連携型中高一貫教育による郷土に根ざす教育をつくり上げてきた。北海道において連携型中高一貫教育は10年余りの歳月を経てきたが、同教育のメリットやその成果について太田教授に聞いた。

\* \* \*

—— 中高一貫教育にはいくつかのタイプがあるといいますが、どのようなタイプに分けられるのでしょうか。

中高一貫教育とは前期中等教育（いわゆる中学校での教育）と後期中等教育（高校）の教育課程を調整し、無駄を省きながら一貫性を持たせた体系的な教育方式。現在、①中学校と高等

学校の教育課程を一つの学校と

して6年間教育を行う「同一学

校型（中等教育学校）」②都道

府県、市町村など同じ設置者が

中学校と高校を設置して教育す

る「併設型」③設置者が異なる

中学校と高校が連携して教育を

行う「連携型」——の三つがあ

ります。北海道内では現在、同

一学校型中等教育学校では北海

道立登別明日中等教育学校（登

別市）、また、平成27年度から

中高一貫教育を行う札幌市立開

成中等教育学校が準備を進めて

います。

私が上川高校の校長を務めて

いた時に行った中高一貫教育は

北海道立上川高校と上川町立上

川中学校との異なる設置者によ

る中学と高校が連携して教育を

行う連携型中高一貫教育に相当

します。

\* \* \*

——その当時、道内では中高一貫教育はどのような形で進められたのでしょうか。

北海道では、中高一貫教育は私立が先行しました。平成12年度に函館ラ・サール（函館市）、立命館慶祥（江別市）、そして平成13年度に北嶺（札幌市）、藤女子（同）がそれぞれ一貫教育を導入しました。その翌年度

に上川中―上川の連携型中高一貫教育が道内の公立学校として初めてスタートしました。それ以後、徐々に増えて現在は7校となっています。当時は「ゆとり教育」が推し進められていましたが、従来のように中学3年間、高校3年間と区切って教育すると同時に、入試を簡便にして長期的視野で教育を施し、さらに地元郷土に密着した教育を進めていくという狙いが中高一貫教育を実施する背景にあつ

たと思います。上川中―上川高の場合は、4年間の準備期間を経て連携型の中高一貫教育を導入しました。

\* \* \*

―それぞれの学校で特色を出しながら今も連携型の教育を進めているのでしょね。

道南の「ししかわ上川中―ししかわ上川高」(胆振管内いぶり鶴川町)は総合学習や自由講座で連携を進め、「うりまく鹿追、うりまく鹿追中―うりまく鹿追高」は、英語教育を中心にした講座を開設し

て連携を進めています。また、平成16年度にスタートした「えりも中―えりも高校」(日高管内えりも町)は環境教育を中心に連携を深めています。ちなみに、えりも町の百人浜は砂漠化していた海岸がクロマツで緑化したことよって昆布が再生したところでも有名になり、環境教育には適していると思います。

\* \* \*

―太田先生が上川高校に在任されていた頃は、どのようなテーマをもって連携を進めていかれたのでしょうか。

学校は地域の中で生きていますが、どうしても学校という小さな「島」の中に閉じこもりがち。そこで中高の連携教育が学校と地域社会を結ぶ架け橋になるべきだと考えました。実際に「学校生活と地域生活を連続させることにより、教育効果が上がる」(米国の教育学者オルセン・E・G)との報告もあります。そこで私は連携の柱を「地域・環境学習」と「進路学習」

と捉え、テーマを絞り込んできました。まずは、求められる教師像としては、基本的に「動く教師」です。多くの専門家や外部機関との構築ができる教師(ネットワーク)、臨機応変に対応できる教師(フットワーク)、そして組織をまとめることのできる教師(チームワーク)が求められます。さらに、学び方を学ぶ総合学習の時間として、地域の資源や人材を活用した体験型の学習を進めていきました。また、地域連携の一つとして地域に拠点を置く大学との連携、さらに環境省などの官公庁との連携や国際理解のための教育を取り入れることにしました。それらをコンセプトに「石狩川の水質調査」、「森林体験学習」、上川高校の女生徒らが行う「ネイチャーガイド」など多くのプロジェクトを実施しています。特に町民の方々と一緒に行う石狩川の水質調査では平成15年にクオアチアで開かれた環境教育の世界大会グループ(GLOB



E)にも参加し、大きな成果を上げました。また、9月の紅葉期にシャトルバスでガイドとして地域の景観を案内する「ネイチャーガイド」は観光客からも評判が高く、今もなお続いています。

現在、連携型の中高一貫教育を進めている公立の学校は7校ということですが、導入するに当たって難しさもあるのではないでしょうか。

北海道で連携型がスタートして11年目です。連携型を押し進めるに当たってメリット、デメリットは多く論じられてきました。現在、進んでいる地域を見ますと、地域の特性に合わせて取り組み、成果を上げていると思います。また、「えりも中―えりも高」「羅臼中―羅臼高」「鹿追中、瓜幕中―鹿追高」などは、生徒の多くが地元の高校に入学するという意味で連携が取りやすい側面があります。学校と地域が連携することで保護

者は安心して子供を学校に預けることができ、学校は教育を通して地域に還元することができます。

一方、教員の側にしてみると、負担が増えるのも事実です。当初、北海道教育委員会(道教委)は連携型中高一貫教育を導入する学校には担当教員を一人配置しましたが、それも今はされていません。ある意味で先生方のボランティアによるところが多いのです。さらに、成功例はあっても、地域ごとに特徴があるので導入するには念入りの準備と工夫が必要です。道教委や市町村の教育委員会の要請でいざ導入しても、人事異動で関心のない管理職や教員が配置され、熱が冷めるように計画が頓挫する例もあります。道内で連携型中高一貫教育が拡大していかないのは、人事異動を含め、教委の長期的な支援が足りないことにも要因があるのかもしれない。

――連携型中高一貫教育が根づくには校長、教員のやる気と、さらに地域の人たちの後押しが必要、ということですね。

確かに、地域の支えは必要です。私も上川高校の校長時代は地域の支えを得るために何度もPTAの会合や学校評議員会議、さらには個別に学校評議員、保護者の方々と話し合い、意見を伺うと同時に、私たちが目指すものを理解していただくために話し合いをしました。同時に、中学校教職員との信頼関係の構築は欠かせませんでした。学校

を応援し、支援してくださる人を増やしていくことが教育を刷新していく糧になります。一方、連携型中高一貫教育を導入した後には生徒の学力の推移を調査したところ、明らかに上昇していることが分かりました。こうした成果もまた地域の人々に信頼される材料になると思います。

連携型中高一貫教育が根づくにはこうした学校と地域の双方方向による信頼構築が重要だと確信します。

◆9月16日付8面

#### \*メモ

おおた・まこと 北海道には662の中学校と302の高等学校がある。少子高齢化の波は過疎化という形で襲ってくるが、そうであればあるほど地方の活性化が緊急の課題となっている。そして、その活性化の一役を担うのが地域での学校力、教育力にあるというのが太田氏の持論である。昭和46年3月に東北学院大学文学部史学科を卒業した後、仙台白百合学園中等高等学校に勤務した後、北海道遠別農業高校、札幌福北高校教諭を経て道立教育研究所、釧路教育局、日高教育局、北海道教育庁教育政策室主幹を歴任、その後、上川高校校長、宗谷教育局長、教育庁教育指導監、札幌月寒高校校長など教育畑を歩む。平成22年に藤女子大学文学部教授に就任。64歳、岩見沢市出身。